

英語教育の根本とは何か(2)

基礎・基本と NEW CROWN

森住 衛

(大阪大学教授)

1. はじめに

世はまさに激動の時代である。英語教育関係だけをとってもめまぐるしく動いている。昨年の秋あたりからの伝聞によると、文部省は今回の学習指導要領は5年後には見直すという。毎年見直していくという報道もなされた。まだ実施もしていないのに、今から見直しの段階に入っているとは、どうなっているのだろうか。このように考えていた矢先の本年に入って、読売新聞(1/5朝刊)に「ゆとり」を取り下げるとい記事が出た。基礎学力が低下しているために習熟度クラスを設けて「伸びる」子どもはもっと伸ばさなければいけない、私立の小・中・高入試の「難問」もある程度は認めるとい。指導要領は最低線だともい。確かに、中学校の英語教育で扱う言語材料や言語活動はどれをとっても重要である。しかし、2002年から再びはじまる「週3時間」ですべての子どもたちに指導要領の内容を教えるのは至難である。このような状況にあって、本稿では、とりわけ重要なものは何か、あるいは何か欠落してはいないか、といういわば「基礎・基本」を考えていくが、これまで本誌の拙論で言及したこととの若干の重なりがあることを容赦願いたい。

2. 言語材料の基礎・基本

一般に、言語材料に関する「知識」は音、文字、語彙、文法、表現の5つの諸相に分かれる。これを知らないと、ことがはじまらない。どれもが必要であるが、特に危うくなっていると思われるのは語彙と文法である。

語彙は周知のように新指導要領では900語になるが、インプットの分量としては少なすぎる。なぜならば、インプットされたものがすべて覚えられないことはないし、覚えられたとしたら、これは子どもたちの特性にどの程度対応しているかという点で、危ういからである。新しい教科書の本文

では900語程度に制限しているが、付録や先生方の自主プリントでこの2倍、3倍の語彙を導入してもらいたい。冒頭に述べたように、指導要領は最低線なのである。当然ながら、これら全部を覚えたり使えたりすることはない。生徒一人ひとりの特性に応じて必要なものが残っていくはずである。このうちどの生徒にも覚えてほしいと思われる語、つまり、900語の中の何が最重要かということについては、現行の学習指導要領の507語のうち機能語を含む400語から450語くらいとなる。新しいNEW CROWNではこの目安を出す予定である。

文法(ここでは文型も含む広義)も、学校教育で生徒に保証してやらなければならない基礎・基本である。会話表現などは他の機会、たとえば、会話学校やホームステイでも習得できる。この15~16年間、文法がやや軽視される傾向にあるが、内容のある発話や文章を聞いたり言ったり、読んだり書いたりするには、文法は欠かせない。この趣旨のもとにNEW CROWNでは伝統的に<文法のまとめ>を設けてきた。しかし、困ったことがある。2002年度から「週3」になるのに、扱う文法の分量は現行と比べて微減なのである。そこで、その中でも基礎・基本は何かとなるが、答えは語順ではなかろうか。語順は、日英語の仕組みの相違という点からも、実際のコミュニケーションという点からも、非常に重要だからである。冠詞とか単複の呼応などは、使用の際に間違いがあったとしても、語順と比べると被害が少ないともいえる。

最後に、言語材料全体にかかわる2点について触れておきたい。まず、音、文字、語、文法、表現など言語材料を扱う「姿勢」についてである。英語教育をはじめとすることばの教育ではともすると生徒の「なぜ」を軽視する傾向がある。しかし、本来、学校教育は世の中に対する子どもたちの「なぜ」に答える場でなければならない。英語の「なぜ」

は、なぜ A や D の小文字が A や d なのか、なぜ night が [nait] なのか、なぜ chalk が「数えられない」のか、なぜ SVO なのか、なぜ So long. が「さようなら」なのか等々無数にある。これらのすべてに明解に答えられるわけではないが、質問を積極的に取り上げ、生徒と一緒に考えてみたい。言語に対する興味・関心を喚起するだけでなく、教育の重要な側面である「わかる」ということにも接近できるからである。もうひとつは、言語材料の定着のための「学習活動」についてである。「コミュニケーション」が人口に膾炙かいしやされるようになってから忘れられがちな活動に「朗読・模写・暗唱」がある。この3つは「コミュニケーション」でないと言われるからであるが、ことばの学習の基礎・基本である。問題なのは、教科書本文などがこの3つに耐え得るかどうか、ということであるが、NEW CROWN はこの点でも、力を注いでいるつもりである。

3. 言語活動の基礎・基本

言語活動のうち Listening・Speaking に関係する英語の「音」については、基礎・基本として、とりあえず RP (Received Pronunciation) ないしは GAP (General American Pronunciation) である。「とりあえず」としたのは、英語圏の人たちすべてがこの発音を使っているわけではないからである。たとえば、RP を話す人は英国では人口の3パーセント以下だといわれているが、さりとて、他のパリエーションのどれをとっても同じことである。留意すべきは、RP や GAP が唯一正しい英語の発音だなどは教えないこと、そして、英語圏に行った場合、RP や GAP 以外の英語を聞く機会が多いが、その時落胆などしないでいいということを生徒に伝えておくことである。

「音」のどの部分が基礎・基本になるだろうか。音指導は大別すると3つに分かれる。まず、[I] とか [T] とかの個々の音の指導、次に、語のアクセントなど「かぶせ音素」の指導、そして、綴りと音の結びつきの指導である。この3つを重要度の順で並べると、挙げてきた逆の順になる。すなわち、綴りと音の結びつきが最も大切で、次にアクセント、最後に個々の音である。beautiful という語はまず「ビューチフル」のように言えるということが先決で、次にこれに「ビューチフル」とアクセント

をつけられること、そして最後に [bjʊ:t@fl] と個々の音も発音できることとなる。最初の beau- [bju:] ビュー [f] [tʃ] フ] [l] [l] であることがわからないために、途中でつまってしまう生徒がなんと多いだろうか。これができて、あとはアクセントがつけば、Communicability はさらに増す。そして、次に個々の正しい音ということになる。この「正しい」音が最後なのは、Englishes と複数形が使われる時代にあって、それぞれの母語に応じたものが許容されるようになってきているからである。この種のバリエーションを理解できない英語母語話者は「非国際的」とも言われている。重要度は前のふたつに比べると落ちる。

Reading・Writing はこれまでも増して重要になる。特に、Reading は他の技能の支えという点で、そして、今の日本の学習環境を考慮するとという点で、4つの技能の中では最重要である。インターネットを駆使する時代でも、やりとりの主流は Reading である。その際、一つひとつの文が理解できることよりも、全体としての大意をとること、求める情報を読みとる Scanning (走り読み) や Skimming (拾い読み) の力が必要になってくる。教科書本課本文や LET'S READ の Q&A はこのために用意されているが、教師用指導書なども利用して、この活動が基礎・基本になってしかるべきであろう。Writing も重要である。発信型コミュニケーションとして Speaking の基礎にもなるし、e-mail など近年の必要度は以前よりも高まっている。本来の議論としても、母語習得や第2言語習得の環境では音声主導が適しているが、外国語教育としては文字主導が適している。新指導要領の総目標では「聞く・話すなど実践的なコミュニケーションの基礎を養う」ということで、「読む・書く」は第二義的な扱いになっているように受け取られがちであるが、この技能は現在より下げてはならない。

4つの技能全般にまたがるものとして Thinking の活動に言及したい。Thinking は交換されるメッセージすなわち題材によって触発される。新指導要領では「実践的コミュニケーション」が謳われ、その具体例として「買い物の仕方」や「電話での応対」が出ている。場面や働きの項目を整理して出してくれているのはありがたいが、これらが言語活動の目標の基礎・基本であるとしてはならないだろ



う。コミュニケーションの本質は、発する側の自己の発露、受ける側の心の打ち震えである。毎回の授業でこのようなことは期待できないにしても、コミュニケーションの根本として忘れたくないものである。そのためには、言語活動で取り上げる題材が重要であるが、これについては前号でも触れているので割愛する。一言だけつけ加えておきたいのは、言語はそれ自体精神そのものなので、言語教育は水泳やパソコンの技術を教えることとは異なるということである。

4. 言語観の基礎・基本

言語材料や言語活動は目に見えるが、見えにくいものがある。英語やことば全体をいかにとらえるかの観点、すなわち言語観である。本誌 42 号でも触れたが、言語観は次のようなことに対して Yes か No かの答えに関係している。

- ・ある国や地域に行ったら、あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う。
- ・国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。
- ・少数民族のことばは滅亡してもやむを得ない。
- ・ことばの学習は役に立たなければ意味がない。
- ・ことばについて考えない人は、人間について考えない人である。
- ・<ことばの教育 = スキルの習熟> である。
- ・<ことばの教育 = 人間教育> である。
- ・英語が話せるということは「国際人」である。
- ・日本でも英語を「第 2 公用語」にしたほうが国際通用力が増す。
- ・日本式英語を堂々と押し進めるべきである。
- ・外国人が法廷に立つようなことがあれば、その母語使用を保証すべきである。

この例でもわかるように、言語観は、言語材料の知識(知る)や言語活動の技能(使う)に対して、観点(判断する)領域に関するものである。NEW CROWN では、この言語観に関わる問題を題材や教科書構成、文法の扱いに至るまで教科書に打ち出してきた。前号で取り上げた英語の中の日本人の姓名の順序などはこの最たる例である。見返しの「世界の言語 いろいろな」こんにち

は」> も英語以外の言語に関心をもつという言語観に関係する。NEW CROWN が伝統的に取り上げてきた登場人物の配置も然りである。題材では 1 年 7 課の English and Japanese は学び合いである。母語を大切にするという点から 2 年 8 課の Ainu, 9 課の The United Kingdom, 11 課の Kenya などを取り上げている。3 年の 3 課の Korea, LET'S READ 3 の Language Life of a People などこの種の言語観を取り上げた教材である。言語観は「判断する」問題なので、どちらがよいかは個人によって分かれる。この種のことも取り上げて、生徒と一緒に考えておきたい。そうすれば、学校教育の自立性を保証することにもなる。英会話教室やホームステイでは、取り上げられることが少ないし、あるいは無意識に偏った形で取り上げられているからである。

5. おわりに

冒頭で正月の新聞報道を取り上げたが、もうひとつ筆者にとって衝撃的な報道があった。元旦の朝日新聞の第 1 面の記事である。IT 革命の一環に翻訳・通訳の機器の発展があるが、「木々の紅葉がきれいですね。なんとという木ですか」「カエデです。もうすぐ葉も落ちるでしょう」などの類の音声認識翻訳は、8 年前は 40 秒かかっていたが、今では 1 秒だそうだ。現在の自動翻訳の技術は、平均の大学生の英会話能力とほぼ同じであるともいう。となると、学校教育でやっていることはどうなるのだろうか。さらに、この種の機器の開発をしている ATR 音声通信言語研究所の所長は「21 世紀は、英語が世界を制圧するか、それとも我々の技術が英語を蹴散らすかである」とも言っている。日英の自動翻訳が進めば、日独、日中など他の言語にも応用は簡単である。英語教育のレーゾン・デートルはどうなるか。

言語教育政策の変転やこの種の機器の発達にも耐えうる英語教育の基礎・基本すなわち英語教育の根本は何になるだろうか。英語を単に「道具」として取り上げるのではなく、異言語の一例としてとらえ、「ことばの教育とは何か」を模索しない限りこの答えは出ない。NEW CROWN はこのことを常に考えてきた教科書である。